

はじめに

本報告書は横浜市立大学商学部吉田ゼミナール 3 年生（第 7 期生）の共同調査の報告書である。この共同調査は、本学の齊藤毅憲教授や早稲田大学の河西宏祐教授が実践されてきたゼミナール教育にヒントを得て一昨年度から始め、今回で 3 回目となる。

暗中模索、手探りで進め、未だ確立したやり方が定まっているというわけではないが、それでも 3 年という月日を経る中でいろいろなことが見えてきた。楽しみとなったこともあれば、やはり今年もうまくいかなかったかということも起っている。そこで三年目の感想・反省ということで今回の報告書の「はじめに」に代えたいと思う。

第一に、インタビュー調査に行く前と後ではゼミ生たちの顔付きが変わるということである。たとえば、教員に言われて仕方なく取り組み始めた調査であっても、実際にインタビューを終えてきたゼミ生たちは問題意識を高め、興味を深めている。おしきせの課題から自分自身の興味関心へと変わっている。だから、夏休みの終りにインタビュー結果を持ちよっておこなう夏合宿は楽みの一つとなっている。夏を前後して大きく変化・成長してくれているからであり、ともすれば白々としたディスカッションも活発になるからだ。調査を通して物事を知り、考えていくということを、今後も私のゼミの基本に据えていきたいと思っている。

第二に、テーマ選択の適否という非常に悩ましい問題である。これまで調査にあたっては大きなテーマを教師が設定し、その中から学生たちが関心のある具体的テーマを見つけるという方針で実施してきた。前者は 30 代のホワイトカラーを主たる対象とし、90 年代以降、リストラや成果主義などの改革の波に飲み込まれている彼・彼女らの意識や実態を明らかにするということがあった。実は、このテーマを設定で一石二鳥を狙っているつもりである。一つは労務管理論を主たる専攻とするこのゼミにおいて、その最も中心となる企業社会の労務管理体制について新しい動向を学ぶ機会にするということである。インタビュー調査にかこつけて、労務管理論風の本や論文を先行研究として読ませようという魂胆である。

もう一つはかつての OB 訪問を念頭においている。学校歴不問の採用や、インターネットを用いた就職活動が一般的になるなかで、一般学生から OB 訪問という文化は衰退しつつある。確かに日本の社会においては学閥や学校歴偏重といった問題が存在し、その具体的形として同窓関係を通じた就職の世話ということがあったといえるが、しかし学生が企業という社会に直接接触するチャンスでもあった OB 訪問の持っていた意義はきちんと評価しておくべきであろう。先輩・後輩関係に支えられているので、忌憚のない仕事の話聞くことができ、それぞれの企業の個性や社風の一端を知ることができた。あえていえば、OB 訪問は、自分に適した企業や仕事を選択していくというジョブ・マッチングの機能を果していたのである。また自分のキャリア・モデルとなるような人を見つけしていくということでもあった。

先の大テーマはこうした機能も期待して設定したのであり、果せるかな、ゼミ生たちの多くが自分の将来と繋がっていくような話を聞き、そして就職活動における糧としてきた。インフォーマントの方々の御協力のおかげもあって、これは本当にうまくいっていると感じている。

ただ欲を言うと、そろそろ大テーマ設定からも教師は足を洗い、ゼミ生たちが自分たちで設定してくれるようになればと思っている。学生たちの自主性に期待するとともに、そして調査対象も、ホワイトカラーに限られたものでなく、パートタイム労働者、派遣労働者、フリーター、組合活動家、外国人労働者などに広がってくれればと思っている。ただ大卒の就職状況が

悪化していることを斟酌するとただちにそうするわけにもいかず、本当に悩ましい課題となっている。

最後に、今の調査手順には抜本的に見直す必要があるということを感じている。インタビューによって動機付けられた学生たちに対して冬学期のゼミでは、その関心を深めたテーマについての統計データや先行研究の探査と利用の仕方について実習するが、この順番では最終報告書執筆時点で統計データに心魅かれてしまい、夏に聞いたインタビューをどうしても疎かにしてしまうことになるということだ。インタビューで動機付けられ、統計データでその答えを探るという手順になってしまっている。教師にとってみれば、マクロ的な動向を踏まえたうえで、しかしそれからだけではおぼろげにしか見えてこない人々の生活体験や気持をインタビュー調査によって明らかにすることに社会調査の醍醐味があると考えているのだが、なかなかそうは問屋がおろしてくれないのである。

ただ単に順序を逆にしただけでもだめであろう。「〇×さんは、ああ言っていたけれど、社会の多くの人も同じように感じているんだなあ。」というように、個々の具体的なインタビューによって関心が出てきたからこそ、ともすれば無味乾燥な統計データに面白さを感じるようになるからである。だから、もう一度春頃に追加のインタビュー調査が行えればというのが教師の望むところであるが、ますます早期化する就職活動を考えるとこれは叶いそうにない。何はともあれ、先行研究の輪読、インタビュー調査、統計の探査という流れを今一度見直し、自分たちの足で稼いだインタビュー調査の成果を大切にするような調査実習へと変えていかねばと感じている。

以上のような反省に立つと現段階で最終報告書とするのはまだ早い。先行研究の読み込みや統計データの探査もまだまだであるし、またインタビューにももう少し深みと突っ込みが欲しいという気もする。しかし、ゼミ生たちの成長を見てきた教員にとっては、何はともあれどうにか一つの報告を作りあげてくれたことに安堵している。それぞれの報告からは個性が顔を出しており、各人の問題意識や思索が芽吹いている。教師としてはこの芽を生かし、来年の卒業論文へと繋げていくよう指導していきたい。

最後になりましたが、お忙しいなか調査に御協力いただいたインフォーマントの方々に御礼を申し上げます。見ず知らずの学生たちに貴重な機会を作っていただいたことに感謝いたしますとともに、今後とも様々な形での御指導・御鞭撻いただければと思っております。

2004年1月20日
横浜市立大学商学部教員
吉田 誠

目次

はじめに	吉田 誠	i
第1章 変り行く日本的雇用慣行	中山 晃正	1
第2章 理想の賃金とは？	滝口 剛	10
第3章 成果主義と労働者	藤来 健太郎	18
第4章 成果主義と人事考課	宮地 友理	29
第5章 転職志向と働き方	藤島 純	41
第6章 キャリア設計の理想と実際	片山 拓	48
第7章 “女性総合職” というもの	新津 麻紀子	54
第8章 社内における女性の立場について	小杉 浩司	62
第9章 働く女性の仕事意識と実態	小松 玲子	69
第10章 共に働く時代	富田 祐子	77
第11章 働く女性に対する意識の変化とその実態	田村 知未	86
第12章 働く女性の意識と社会における立場	長澤 睦美	92
第13章 仕事と共に生きる女性の今	富嶋 葵	100